方の祖母と私も今も　伊神　聖子

・天井で八方睨みの雲竜図苦手な上司の目つきに似てる　木内美由紀

・姥百合をうっとり抱える空蝉は琥珀色に透く木漏れ日の中　小宮　教子

・ローソンの前で寝ている青年も栄の朝に溶け込むひとり　諏訪　花

・あったこともなかったことにする道具白い消しゴム今日も使って　田中　和美

・雷過ぎて東の空にぬっと立つ七色アーチのむらさきの濃し　近森起久子

・ハンガーに今日着た服を掛けたれば今日一日の吾が吊るさる　山川　知子

揚羽蝶の叫び

斎藤佐知子

岩永芳人作。身近な小さな昆虫の声を掬い取っている連作。ガラス窓に閉じ込められた蝶の叫び、けけと鳴く蛙、声もなく去るものの代わりに鳴くひぐらし等、作者の感情移入による思い込みとはいえ、自然界に生きるもの達の負う不条理の、ある一面に触れ共感している。

山口ゆかり作。夫と共に船底の塗装に従事する職業詠、力作である。

武富純一作。どこかのだれか、だれかのどこか、言葉の関節が柔軟なのだろう。

星野さいくる作。死にたくなったりしない駱駝、本当は死にたいのに？

・ドジャースが勝てば西空遠花火隣りの人も外にでている　青木　泰子

・朝陽背に歩み来る顔後光射し挨拶さるるも目鼻判らず　稲垣　国男

・北の地のみじかい秋を終わらせる雨は深夜に音をうしなう　大塚　亜希

・毎日が帰省のように思われてただわが家にひたひた帰る　桑野　智章

・懐かしい人がゆらりと現れるような気のする霧の朝よ　小林　まや

・亡き人が夢に出てきて笑むまでの十七年やながきみじかき　小峰　圭子

・雨止みて小暗き朝の庭の内きっぱりと黄なり萩のもみじは　坂本　朝子

・屋根つきの歩道橋にてほの暗く男ふたりとすれ違いたり　しおせとくや

・気を病む子との会話絶え雨再び枇杷の葉揺らし風の音となる　武井よしこ

・沙羅の葉は母の忌明けに深紅（クリムソン）わずかな風に今しも落ちん　中田久実子

・千年の前の美男子直筆の読めぬが凝視（みつめ）る「御堂関白記」　西村ミネ子

・富士の山夏は終わりと気づきたりパキッと空気が固まった朝　平野　京子

・検診のたび縮みたる吾の背丈踵浮かすを看護師見ぬく　保坂たまき

・砂色に世界の暮れて思いがけず貰いしコーランめくるはつふゆ　宮原　千晶

・落ち溜まる金木犀のあるところゆっくりゆっくり垣根はつづく　安冨　節子